様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２２ 日現在

機関番号：３４６０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ００６１８

研究課題名（和文）終助詞に関する類型論的研究－日本語と韓国語を中心に－

研究課題名（英文）A typological study on final particles -Focusing on Japanese and Korean-

研究代表者
金　善美（Kim, Sunmi）

天理大学・国際学部・教授

研究者番号：２０４１１０６９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：研究代表者と研究分担者2名は、以下のような研究活動を行った。まず韓国語と日本語の標準語、韓国語済州方言と全羅南道方言における終助詞の出現様相と情報管理機能について考察した。新型コロナウイルス感染症拡大以前の時期には、全羅南道方言の母語話者を対象に自然発話の言語データを収集した。さらに本研究の成果を、韓国の学会の国際学術大会で招聘研究発表を行い、関連学術誌に論文を掲載した。また終助詞と共有知識管理に関する研究発表、危機言語としての地域のことばに関する論文執筆があった。さらにパプア諸語と日本語の源流、日本語の動詞語幹とアクセントについて執筆を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
終助詞に関する従来の研究では韓国語標準語を中心に考察が行われた結果、韓国語は終助詞の未発達な言語だとされてきた。そのような状況下で本研究は、韓国語標準語と、標準語に比べて終助詞の発達した済州方言・全羅方言とを比較し、韓国語終助詞の統語的特徴・談話機能について記述・分析する最初の本格的な研究である。また終助詞の発達した日本語標準語、文末の活用語尾が発達しているが終助詞もそれなりにある琉球諸語との比較考察を行うことによって、日韓の終助詞と文末語尾との相関関係を究明する、一般言語学的観点からも貢献度の高い研究である。さらに各言語の方言の記述と分析に基づいた方言研究の重要性を社会的に発信できた。

研究成果の概要（英文）：The principal investigator and two co-investigators conducted the following research activities. First, we examined the distribution patterns and information management functions of final particles in standard Korean and Japanese, and Jeju dialect, as well as Jeollanam-do dialect of Korean. Before the spread of the COVID-19 pandemic, we gathered natural speech language data from native speakers of the Jeollanam-do dialect. Subsequently, we presented our research findings in an invited research presentation at an international conference hosted by a Korean scholarly association and published the paper in a relevant academic journal. We also presented the research on final particles and shared knowledge management, and wrote a paper on a regional tongue as an instance of an endangered language. We also wrote a study on Papuan languages and the origin of Japanese as well as on verbal stems and accent in Japanese.

研究分野：韓国語学、日本語学、対照言語学

キーワード：終助詞　終結語尾　情報管理機能　韓国語標準語　日本語標準語　済州方言　全羅南道方言　琉球諸語

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

現代日本語の標準語は終助詞が発達しているのに対し、韓国語標準語（ソウル方言）と琉球諸語では終助詞の数が少なく文末の活用語尾が発達していることは既に指摘されている。一方、韓国語済州方言と全羅方言において、様々な終助詞が観察されている事実を踏まえて行われた本格的な先行研究はない。また、これら両方言（済州方言と全羅方言）の終助詞が談話の中で果たす機能について実証的データをもとに分析した先行研究はほとんどない。その中、イ・ギガプ(李基甲) 教授が、イ・ギガプ(李基甲 2018a)『국어 방언의 담화표지』(韓国語方言の談話標識)と、李基甲(イ・ギガプ 2018b)「韓国語方言の談話標識」に関する公開講演において、韓国語方言全般における談話標識について考察した。

終助詞に関する従来の研究においては、韓国語標準語（ソウル方言）を中心に考察が行われた結果、韓国語は終助詞の未発達な言語だとされてきた。そのような状況下で本研究は、韓国語標準語と、標準語に比べて終助詞の発達した済州方言・全羅方言とを比較し、韓国語終助詞の統語的特徴・談話機能・歴史的発達過程について記述・分析する最初の本格的な研究である。また、終助詞の発達した日本語標準語、文末の活用語尾が発達しているが終助詞もそれなりにある琉球諸語との比較考察を行うことによって、日本語と韓国語において終助詞と語尾との相関関係を究明する、一般言語学的観点からも貢献度の高い研究だと考える。

研究代表者の金善美と、研究分担者の田窪行則と千田俊太郎は、研究開始当初まで定期的に言語学に関する研究会を開き、意見交換を続けてきた。その中で、言語話者の心理状態の伝達を担う言語形式として、主に終結語尾体系を持つ言語（韓国語標準語）と、終助詞体系をも合わせ持つ言語・方言（日本語標準語、韓国語済州方言と全羅方言、琉球諸語）が存在するという事実に気が付いたことが本研究の始まりである。また海外研究協力者のイ・ギガプ教授は、韓国国立木浦大学の教授で、普段から研究交流を行っていたが、本研究と関連し、研究初年度に韓国全羅南道の木浦市にある国立木浦大学の学生達を対象にインタビュー調査、研究 2 年目には老年層の言語話者へのインタビュー調査を行う上での協力をいただけることが決まり、本研究は開始した。

＜参考文献＞

イ・ギガプ (李基甲 2018a)『국어 방언의 담화표지』(韓国語方言の談話標識), 図書出版亦楽(韓国).

李基甲(イ・ギガプ 2018b)「韓国語方言の談話標識」, 第 69 回朝鮮学会大会公開講演, 朝鮮学会, 於：天理大学.

２．研究の目的

本研究の目的は、韓国語と日本語を中心として文末に出現する終助詞、及び活用語尾について類型論的な観点からその形態・統語・意味、及び談話機能について考察することである。終助詞が発達した現代日本語標準語に対し、韓国語標準語（ソウル方言）は終助詞の数が少なく、代わりに文末の活用語尾が発達している。ところで韓国語済州方言と全羅方言は活用語尾も一定数あるが、標準語よりも多様な終助詞が観察され、中間的だと言え、琉球諸語も同様に中間的である。この、済州方言・全羅方言の終助詞が談話の中で果たす機能については、実証的データを基に分析した先行研究がほとんどない。本研究は、終助詞体系型言語（日本語の標準語）と終結語尾体系型言語（韓国語標準語）と、両者の中間体系型の方言（琉球諸語、韓国語済州方言・全羅

方言）を研究対象にし、一般言語学的な観点から、それらの言語における終助詞体系及び文末語尾体系の文法機能、談話上の役割を考察した。

３．研究の方法

研究代表者と研究分担者 2 名は、以下のような研究活動を行った。まず新型コロナウイルス感染症拡大以前の 2019 年度には、全羅南道方言の母語話者を対象に自然発話の言語データを収集した。その後、新型コロナウイルス感染症の世界的な拡大により現地調査ができなくなった 2020 年度から 2022 年度にかけては、それ以前に収集した自然発話の言語データ及び既存の文献資料を分析しながら、韓国語と日本語の標準語、韓国語済州方言と全羅南道方言、琉球諸語における終助詞の出現様相と情報管理機能について考察し、学会での研究発表、学術誌への論文掲載を行った。

４．研究成果

研究代表者の主な研究として金善美（2022a）では、本研究の考察の結果、次のような事項を確認した。第一に、韓国語標準語と方言（済州、全羅南道）の終助詞は文中と文末の両方で出現が可能であり、それぞれの終助詞が出現するスピーチレベルが定まっている。第二に、韓国語の標準語では日本語の終助詞に該当する情報機能は「-ci」（確認)、「-kwun」(分析、驚き、発見)、「-ney」(発見、感嘆)、平叙・疑問・命令・勧誘の語尾等、動詞の語尾として出現するが、韓国語方言（済州方言、全羅南道方言）においても話し手にとって情報の出入りに関与する形式は活用語尾が担当し、終助詞は情報管理機能を持たない。ただ全羅南道方言の一部の終助詞は「確認」という情報機能を担当することを確認した。第三に、韓国語標準語と方言（済州、全羅南道方言）において一般的な終助詞の役割はスピーチレベルの区別標識としての役割、聞き手に対する話し手の感情的な連帯感の伝達、強調などを担うということが確認できた。

さらに上記の研究を発展させた金善美（2022b）の考察からは以下のようなことが分かった。第一に、日本語の終助詞と韓国語の終結語尾を、事態認識上の分析・感嘆・驚き・確認という情報管理機能のタイプ別に分類すると、I 日本語終助詞「ね」「よ」グループは「聞き手伝達型」、II 日本語終助詞「わ」「な」「なあ」グループは「話し手完結型」、III 韓国語終結語尾「kwun」「ney」「ci」グループは「話し手完結型」、IV 韓国語終助詞「yo」「kulye」グループは該当なし、という結果となる。第二に、韓国語と日本語において観察される話し手の独話（独り言）は、話し手が自分が置かれている状況や事態を認識した上での驚き・分析を担う「情報管理機能」を持っているが、これは聞き手との対人関係を考慮しつつその情報を相手に伝達するものではない、ということが確認できた。

研究分担者の田窪行則は、従属節における係りの深さと受けの広さの相関について執筆し、統語論と談話管理に関する考察を行った。また終助詞と共有知識管理に関する研究発表、Morphophonemics of Ikema Miyakoan と題する論文執筆を行った。さらに『南琉球宮古語 池間方言辞典』の共同編著を行い、危機言語としての地域のことばについて執筆した。

研究分担者の千田俊太郎は、パプア諸語と日本語の源流、日本語の動詞語幹とアクセントについて執筆を行った。また「언어 유형론적으로 본 에스페란토 –그 극단적이고 비알타이적인 교착성–」（言語類型論的に見たエスペラント：その極端で非アルタイ的な膠着性）と題する論文と、「“Kial multas adjektivoj en Esperanto? Komparo kun la korea, la japana, Dom, Tokpisino kaj aliaj lingvoj”」と題する論文執筆の成果があった。

＜参考文献＞

金善美（2022a）「한국어와 일본어 표준어, 한국어 제주방언과 전라남도방언 종조사의 출현양상과 정보관리기능」(韓国語と日本語の標準語、韓国語済州方言と全羅南道方言における終助詞の出現様相と情報管理機能),『国語文学』第 80 輯：pp.25-48. 国語文学会（韓国）.

金善美（2022b）「韓日終助詞と終結語尾の情報管理機能と話し手・聞き手との相関性，そして三層モデルの視座」,『比較・対照言語研究の新たな展開 —三層モデルによる広がりと深まり—』: pp.190-210. 開拓社（東京）.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計22件（うち査読付論文　8件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　10件）

１．著者名 金善美	４．巻 80
２．論文標題 「韓国語と日本語の標準語、韓国語済州方言と全羅南道方言における終助詞の出現様相と情報管理機能」（原文：韓国語）	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『國語文學』,國語文學會（韓国）	６．最初と最後の頁 25-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 金善美	４．巻 －
２．論文標題 「韓国語済州方言の自然発話のテキスト－昔の食べ物－」（原文：韓国語）	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『韓国語済州方言と言語研究の求心力と遠心力』（原文：韓国語），図書出版ヨクラク(韓国)	６．最初と最後の頁 171-196
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 金善美	４．巻 －
２．論文標題 「韓日終助詞と終結語尾の情報管理機能と話し手・聞き手との相関性，そして三層モデルの視座」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『比較・対照言語研究の新たな展開－三層モデルによる広がりと深まり－』，開拓社（東京）	６．最初と最後の頁 190-210
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 田窪行則	４．巻 54(10)
２．論文標題 危機言語としての地域のことば	５．発行年 2022年
３．雑誌名 ユリイカ	６．最初と最後の頁 69-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Takubo, Yukinori	4．巻 —
2．論文標題 Morphophonemics of Ikema Miyakoan	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Studies in Asian Historical Linguistics, Philology, and Beyond.	6．最初と最後の頁 pp.65-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1163/9789004448568_007	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

1．著者名 千田俊太郎	4．巻 80
2．論文標題 「言語類型論的に見たエスペラント：その極端で非アルタイ的な膠着性」（原文：韓国語）	5．発行年 2022年
3．雑誌名 『國語文學』，國語文學會（韓国）	6．最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 —

1．著者名 千田俊太郎	4．巻 —
2．論文標題 「Webと語彙集：韓国語済州方言の語彙研究の課題と展望」（原文：韓国語）	5．発行年 2022年
3．雑誌名 『韓国語済州方言と言語研究の求心力と遠心力』（原文：韓国語），図書出版ヨクラク(韓国)	6．最初と最後の頁 153-169
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

1．著者名 千田俊太郎	4．巻 3(11)
2．論文標題 “Kial multas adjektivoj en Esperanto? Komparo kun la korea, la japana, Dom, Tokpisino kaj aliaj lingvoj”	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Esperantologio / Esperanto Studies	6．最初と最後の頁 22-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

1．著者名 千田俊太郎	4．巻 13
2．論文標題 「計劃言語とピジン・クレオール」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Language and Linguistics in Oceania	6．最初と最後の頁 pp. 16-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 千田俊太郎	4．巻 21
2．論文標題 「エスペラントの出動形容詞の動詞活用をめぐつて」	5．発行年 2022年
3．雑誌名 『ありあけ：熊本大学言語学論集』	6．最初と最後の頁 pp. 1-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 金善美	4．巻 -
2．論文標題 「推量・意志を表す韓国語の-keyss-、-ul kes i-の出現様相　指示詞との関連」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『［研究プロジェクト］時間と言語　文法研究の新たな可能性を求めて』ひつじ書房（東京）	6．最初と最後の頁 pp.317-340
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 金善美	4．巻 20
2．論文標題 「韓国語標準語・済州方言・全羅南道方言の終助詞と情報管理機能」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『ありあけ　熊本大学言語学論集』	6．最初と最後の頁 pp.73-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 田窪行則	4．巻 13
2．論文標題 「方言を仮名で書く―琉球宮古語池間方言を例に」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『ことばと文字』	6．最初と最後の頁 pp.102-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Masahiro Yamada, Yukinori Takubo, Shoichi Iwasaki, Celik Kenan, Soichiro Harada, Nobuko Kibe, Tyler Lau, Natsuko Nakagawa, Yuto Niinaga, Tomoyo Otsuki, Manami Sato, Rihito Shirata, Gijs van der Lubbe, and Akiko Yokoyama	4．巻 26
2．論文標題 Experimental Study of Inter-language and Inter-generational Intelligibility: Methodology and Case Studies of Ryukyuan Languages.	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Japanese/ Korean Linguistics	6．最初と最後の頁 pp. 249-260
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 千田俊太郎	4．巻 12
2．論文標題 「ドム語の「一」を表はす形式とその用法について－同一性、唯一性、非現實性、 個々別々性、不定性、特定性－」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『言語記述論集』	6．最初と最後の頁 pp. 175-203
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 千田俊太郎	4．巻 15・16
2．論文標題 「オセアニアの少数言語」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『GR-同志社大学グローバル地域文化学会紀要』	6．最初と最後の頁 pp. 1-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 千田俊太郎	4．巻 20
2．論文標題 「書評論文：金鍾徳著『韓国語を教えるための韓国語の発音システム』（中村麻結訳）東京：ひつじ書房 2021」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『ありあけ　熊本大学言語学論集』	6．最初と最後の頁 pp．1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 金善美	4．巻 19
2．論文標題 「韓国語と日本語の終助詞と終結語尾の情報管理機能について」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『ありあけ　熊本大学言語学論集』	6．最初と最後の頁 33-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 田窪行則	4．巻 1
2．論文標題 「従属節における係りの深さと受けの広さの相関について」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 KLS Selected papers	6．最初と最後の頁 220-225
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15084/00003011	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 千田俊太郎	4．巻 -
2．論文標題 「パプア諸語と日本語の源流」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『日本語「起源」論の歴史と展望 日本語の起源はどのように論じられてきたか』三省堂	6．最初と最後の頁 127-152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 千田俊太郎	4．巻 19
2．論文標題 「日本語の動詞語幹とアクセントに關する覚え書き」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『ありあけ 熊本大學言語學論集』	6．最初と最後の頁 1-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 李基甲著・千田俊太郎訳	4．巻 251
2．論文標題 「韓国語方言の談話標識」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『朝鮮学報』	6．最初と最後の頁 1-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計18件（うち招待講演　8件／うち国際学会　5件）

1．発表者名 金善美
2．発表標題 「韓日標準語、韓国語済州方言と全羅南道方言の終助詞の出現様相と情報管理機能」（原文：韓国語）
3．学会等名 東アジアの言語及び方言研究の地形図：國語文學會(韓国)・韓國言語文學會(韓国)共同主催国際学術大会（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2022年

1．発表者名 金善美
2．発表標題 「韓国語と日本語の「遭遇系間投詞」にかかわる談話参与者の経験と知識情報について」
3．学会等名 洛中ことば倶楽部第32回例会
4．発表年 2023年

１．発表者名 金善美
２．発表標題 「韓日終助詞と終結語尾の情報管理機能と話し手・聞き手との相関性について」
３．学会等名 朝鮮学会第72回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 金善美
２．発表標題 「韓国語と日本語の終助詞と終結語尾の情報管理機能と聞き手の存在について」
３．学会等名 洛中ことば倶楽部第25回例会
４．発表年 2021年

１．発表者名 金善美
２．発表標題 「韓国語の単純存在表現と様態存在表現について」
３．学会等名 大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 田窪行則
２．発表標題 「終助詞と共有知識管理」
３．学会等名 自閉スペクトラム症（ASD） における言語と共感機能（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Yukinori Takubo
２．発表標題 Questioning epistemic necessity in Korean and Japanese
３．学会等名 The 2021 International Roundtable Forum of Asian Languages（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 田窪行則
２．発表標題 日本語時間名詞の構造について
３．学会等名 東京外国語大学語学研究所講演会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Natsuko Nakagawa, Masahiro Yamada, Kenan Celik, Nobuko Kibe, and Yukinori Takubo
２．発表標題 Archiving system of endangered languages in Japan: A preliminary report
３．学会等名 International Conference on Language Technology for All, UNESCO（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yukinori Takubo
２．発表標題 How to derive concessive meaning from (nin-)shift in time
３．学会等名 NINJAL-UHM Linguistics Workshop on Syntax-Semantics Interface, Language: Acquisition, and Naturalistic Data Analysis, University of Hawaii at Manoa（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 千田俊太郎
２．発表標題 「言語類型論的に見たエスペラント：その極端で非アルタイ的な膠着性」（原文：韓国語）
３．学会等名 東アジアの言語及び方言研究の地形図：國語文學會(韓国)・韓國言語文學會(韓国)共同主催国際学術大会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 千田俊太郎
２．発表標題 「ドム語の單純存在表現と様態存在表現」
３．学会等名 大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 千田俊太郎
２．発表標題 「ドム語の直示表現」
３．学会等名 類型學研究會、京都大學
４．発表年 2019年

１．発表者名 千田俊太郎
２．発表標題 「ドム語の空間表現」(原著：韓国語）
３．学会等名 コリアン・ラウンド・テーブル、同志社大學
４．発表年 2019年

１．発表者名 千田俊太郎
２．発表標題 「ドム語の語順とその地域的背景」
３．学会等名 言語記述研究會、京都大學
４．発表年 2019年

１．発表者名 千田俊太郎
２．発表標題 「朝鮮語の述語と證據性・意外性」
３．学会等名 言語の類型的特徴をとらえる對照研究會、大阪府立大學サテライト I-Site なんば
４．発表年 2019年

１．発表者名 千田俊太郎
２．発表標題 「シンブー諸語と語聲調」
３．学会等名 言語記述研究會、京都大學
４．発表年 2020年

１．発表者名 千田俊太郎
２．発表標題 「日本語の動詞活用形の分析について」(原著：韓国語)
３．学会等名 コリアン・ラウンド・テーブル、同志社大學
４．発表年 2020年

〔図書〕　計2件

1．著者名 仲間博之，田窪行則，岩崎勝一，五十嵐陽介，中川奈津子 共編	4．発行年 2022年
2．出版社 国立国語研究所 言語変異研究領域	5．総ページ数 460
3．書名 南琉球宮古語 池間方言辞典	

1．著者名 田窪行則、野田尚史編著	4．発行年 2020年
2．出版社 くろしお出版	5．総ページ数 228
3．書名 『データに基づく日本語のモダリティ研究』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	田窪　行則 (Takubo Yukinori) (10154957)	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・大学共同利用機関等の部局等・所長 (62618)	
研究分担者	千田　俊太郎 (Tida Syuntaro) (90464213)	京都大学・文学研究科・教授 (14301)	

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関